

サバティカル期間における研究経過・成果報告書

平成29年10月4日

国立大学法人茨城大学長 殿

所属・職名 教育学部・教授

氏 名 甲斐 教行

下記のとおり、サバティカル期間が満了しましたので、研究経過・成果等を提出いたします。

サバティカル制度を利用した期間

平成28年5月16日 ~ 平成29年1月17日

①研究経過について  
(利用期間を月単位などに区分して、具体的な研究経過を記入して下さい。)

5月～7月 フィレンツェ国立中央図書館におけるバンディネッリ家関連古文書を調査し、同家の家系図等を精査した。またハーヴァード大学付属図書館ヴィッラ・イ・タッティでバンディネッリのパトロンであった教皇クレメンス七世に関する調査を実施した。  
8月 フィレンツェ美術史研究所でクレメンス七世についての調査を継続した。  
9月 シエナの個人蔵板絵《バッチョ・バンディネッリのアカデミア》を実地調査し、記銘と家紋を精査、シエナ古文書館に所蔵されるバンディネッリ家系図と照合した。  
10月～12月 ヴァティカン図書館所蔵ラテン語写本の複写を入手し、枢機卿時代のクレメンス七世の思想について検討した。  
11月 フィレンツェ美術史研究所にて「日本におけるヴァザーリ翻訳」というテーマでセミナーを実施した。  
1月 収集した資料の郵送等、帰国準備を行った。

②研究成果について  
(目標の達成状況及び研究成果の公表予定について記入して下さい。)

16世紀フィレンツェで活躍した彫刻家バッチョ・バンディネッリ(1493-1560年)の前期作品を主要なパトロンであった教皇クレメンス七世の思想に照らして解釈しようとする新しい試みは、枢機卿時代を含むクレメンス七世周辺の文化圏の調査、特に枢機卿時代のクレメンスに捧げられ、彼自身が登場人物として活躍する対話篇を特定し、教皇の思想を理解する重要な資料の発見となった。  
またバンディネッリの構想に基づく版画《バッチョ・バンディネッリのアカデミア》(エネア・ヴィーゴ版刻)と同寸・同一構図でありながら、周囲にバンディネッリ家の祖先・縁戚の家紋と記銘が配された板絵(シエナ、個人蔵)の実地調査を実施し、すべての登場人物を特定するとともに、従来美術史的にまったく考察されてこなかった本作の意味と重要性について歴史的に位置づけた。その成果は来年度の『五浦論叢』(茨城大学五浦美術文化研究所紀要)第25号に投稿予定である。  
このように、バンディネッリの制作環境の文化的・精神的背景の特定に大きな成果が期待されるため、本研究課題をもって次年度科学研究費(基盤研究C)の申請を準備中である。